

京極御息所褒子歌合注釈（二）

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

岡田 博子

Okada Hiroko

小池 博明

Koike Hiroaki

要 旨

延喜二一（九二二）京極御息所褒子歌合について、一〇番歌から一八番歌まで注釈を施したものである。

キーワード：歌合 京極御息所 褒子 宇多法皇 藤原忠房

伊勢 凡河内躬恒 春日社

本稿は「京極御息所褒子歌合注釈（二）」（『上田女子短期大学紀要』第二七号 平16・1）に続き、一〇～一八までの三番九首に注

釈を施したものである。本注釈の方針・凡例については前号を参照されたい。ただし、前号の凡例には示していない括弧書きの本文は、別筆による補入を示したものである。

注 釈

【本文】

本

10 ちはやぶるかすがのはらにこきまぜてはなともみゆるかみのき

ねかな

躬恒
みつね

【校異】

○本—本四 ○み躬恒つね—躬恒 ○かすかのはらに—かすかの、へに

○はなともみゆる—花かともとみゆる ○かみのみやこびときねかな—かみのきね

かな

【通釈】

(青々とした)春日の原に(色鮮やかに)混じり合つて、あたかも花かとも見える巫女たちだよ。

【語釈】

○みづね 躬恒 当該歌が躬恒の代作であることを示す。他に19・22・

28・31・34・52にも同様の作者記載が見られ、いずれも躬恒集に収められている。○ちはやぶる 3語釈参照。特定の社名に冠する場合は「賀茂」が一般的で、「春日」の例は珍しい。「ちはやぶる神の社」しなかりせば春日の野辺に粟蒔かましを」(万葉・卷三・譬喩歌・四〇四)と詠まれるごとく、該所が春日社創建以前から信仰の対象とされていたことを鑑みると、代作者躬恒はそのことを踏まえた上で、その神威を強調すべく「ちはやぶる」の枕詞を冠したものである。○かすがのはら 廿卷本には「かすかの、へ」とあるが、後掲歌日記には「右かたとき〇はらといふもしをあやまちてのへにかけり」とあるので、「はら」が原態とみておきたい。なお、躬恒には「いづれをか花とはわかんふるさとの春日のはらにまだきえぬゆき」(躬恒集⑦三二)の歌もあるが、第四句は諸本により「春日の野辺」「春日の里」と本文が揺れている。○こきませで 混ぜ合わせて。取り合わせて。「みわたせば柳桜をこきませで宮ごぞ春の錦なりける」(古今・春上・五六・素性法師)、「くれなゐの蓮うかべる緑沼に白波立てばこきませの花」(延喜六年右兵衛少尉貞文歌合・七)。本歌合58・60にも用いられる。青み渡る春日の原と女官たちの華麗な装束が織りなす色彩美。○かみのきね みやこびと 「きね」は神に仕え、神楽を奏したり祝詞をあげたりする人。「きねとは巫

女をいへばなり」(奥義抄)。「霜八度 置けど枯れせぬ 榊葉のたち栄ゆべき 神の巫女かな」(神楽歌・採物・榊/古今・神遊びの歌・一〇七五)。また、躬恒には「延喜御時月次御屏風に/神まつる卯月にさける卯の花はしろくもきねがしらげたるかな」(拾遺・夏・九一)の歌もある。本行本文に従えば、1の「やをとめ」と同様、八乙女舞を演じる春日大社の巫女たちを花に見立てたものだが、行幸に供奉した女官たちをなぞらえてもいよう。校合本文および後掲躬恒集の「みやこびと」のほうが直截的な表現であるが、枕詞「ちはやぶる」を冠していることを鑑みれば、本行本文を原態とみるべきであろう。

【他出文献】

躬恒集IV三二七(私家集大成・中古I所載)

(法皇六条の御息所かすかにまうつるときに大和守忠房朝臣あひかたらひて、このくにのなところを倭歌八首よむへきよしかららふによりて二首おくる、于時延喜廿一年三月七日) ちはやふりませではなともみゆるみやこ人かな

【参考】

躬恒の代作歌。新編国歌大観第三卷所載の躬恒集では、当該歌について歌合本文に依拠した大幅な校訂が施されており、他出文献は私家集大成の本文を掲げた。

結句の異同について、大系は返歌との対応性から並列本文の「みやこひとかな」に蓋然性を認めるが、ここはむしろ本行本文を原態とみて、「きね」を花に喩えることで女官たちの絢爛たる装いをも賞美したものと解すべきであろう。

なお、同時代和歌における「きね」の用例としては、他に、

足曳の山の榊のときはなるかげにさかゆる神のきねかも

(貫之集③一八七)

榊ばのときはにあればながけくに命たもてる神のきねかな

(同 五四四)

やしろにもまだきねすゑずいしがみはしることかたし人のこころを(篁集一二)

などがある。躬恒歌は「花」との配合に特徴がみられるのに対し、貫之歌は榊とともに長寿と繁栄を寿ぐなど、その詠法には各々の個性が反映している。

【本文】

左勝

11 かすがの、はなどはまたもみえぬべしいまこむはるのかざしがてらに

【校異】

○左勝—左かつ かへし ○いまこむ—千とせのいまこむ ○かざしかてらに—かざしかてらに ある本二ちとせのはなるのかざしかてらにとあり

【通釈】

私たちが春日野の花とは、今度もそう見えるにちがいありません。なぜなら、今度の御幸には来春のかざしをかざしがてらに参ります

から。

【語釈】

○かすがの、はな 本歌「はなともみゆる」を受け、女官を花に見立てる。○とは 本歌「とも」を受けつつ、切り返す。係助詞「も」は、他に類似のものがあるという含意を表すことにもなるので、女官は花以外にも見えるという曖昧さが残る。それを当該歌では、他を排除する係助詞「は」を使って、私たち女官は春日野の花以外には見えないというニュアンスを添えて、切り返す。○またも 次も。○みえぬべし 「ぬべし」は、来春も女官自らが、春日野の花と見えることを強く確信することを表現する。これには来春の宇多上皇と御息所との春日詣での実現が前提となるのだから、言外に来春もこの御幸が実現するとの含みがある(無論、言葉の上のことであつて、来春の御幸が実現するとの予測を表現しているのではない)。この含みは、さらに、上皇の褒子寵愛の末永いことと、上皇と藤原氏とのより強い紐帯への期待をほめかすことにもなる。○いまこむはるのかざしがてらに 「いまこむはる」は、来春。「いまがいへにいくたのもりの藤の花いまこん春もかくこそはみめ」(古今六帖・二・もり・一〇五四)。第二句「またも」に呼応。「はるのかざしがてらに」は、春のかざしの花をかざしがてらに来ましようの意。挿頭は、「もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける」／春くればやどにまづさく梅花君がちとせのかざしとぞ見る」(古今・賀・三五二・貫之)などのように、祝祭的で呪的なものであった。御幸にちなんだ歌合という晴れの場面や、「またも」「いまこむはる」という将来を表す語句を考慮すれば、当該歌の

「かざし」にも、そうした賀的な要素と華やかな雰囲気を読み取れる。

【他出文献】

なし

【参考】

本歌の「はなともみゆる」という、花以外にも見えるとの含みとも読める表現（無論、本歌の作者にはそうした意図はないのだが）の隙を突いて、来春は花そのものをかざしてくるのだから、花以外には見えないに違いないと答えた。本歌「はなともみゆる」に対して「はなともみゆる」、本歌「みゆる」に対して「みえぬべし」に、切り返しのニュアンスが表現される。

【本文】

右

12 はるがすみたちまじりつ、ゆくからにあだにもはなの（み）えにけるかな

右かた、ときのはらといふもじを、あやまちてのべにかけり。こゝにとひていはく、「これ」をうけたまはる。ひと、だいのこゝろをたがふるは、（まけ）としてよまず。されば、みぎかたのまけなり。たゞふさそうしていはく、「かのはらといふもじ、ちのはのべといふあざなり。されど、右おとれり。まされる、かさねてぢぞまうすべし」。おほせにいはく、「まうすむねさにあらず。ことのりつきず」。

さきにおほするなむ、れい、たゞふさしたをまきかうべをたれて、や、ひさしくありて、「ことのりあたるどころ、よろしくしてしかるべし」とて、「さらにそのり□をせよ」とて、右かたまけになりぬ。右かたはよみにだにもよませず。

【校異】

○ゆくからに―ゆくからに ○あたにも―あたにも ○はなの―花と ○ときのはら―ときにはらせ ○こゝにとひて―みきとひて ○（これ）を―これを ○（まけ）―まけ ○た、ふさ―た、ふさ ○ことのりつきすさきに―ことのりつきす、さきに ○れい―れいの ○あたるどころ―あたる方 ○よろしくしてしかるへし―こゝろよろしくしかるへし

【通釈】

春霞に混じりながら行くので、かりにも私たちが花のように見えたのだなあ。

右方が、この歌を提出するときに、本歌の「原」という文字を、誤って「野辺」の字に書いた。ここで左方が右方に問うて言うことには、「こんなことをお聞きしています。人が、題の本意を間違えた場合は、負けとしてその歌を読みません。だから、右方の負けです」。忠房が（宇多上皇に）奏上して言うには、「あの『原』という文字は、実は『野辺』という字です。けれど、右歌が劣っています。（右歌の）優れている点を、（その劣っている点に）加えてこゝは持と申すべきです」。仰せにおつ

しやることには、「(左方が)申す趣旨はそうではない。(それでは)理が尽くされていない」。(左方が反論する)前に上皇がおっしゃるので、(上皇の威厳に)例によって忠房が沈黙し頭を垂れて、そのままの状態がやや長く続いて、「左方の申すこと、道理にかなう点、すばらしくてそのとおりに違いありません」と言うので、(上皇が)「(ならば)あらためてその道理を尽くせ」とおっしゃり、右方が負けになった。右方は、披講することさえさせてもらえなかった。

【語釈】

○はるがすみたちまじりつつ 「たちまじる」は、「異質なものが中に交じる意。本歌の美的表現「こきまず(摘み取った花や紅葉などを、きれいに混ぜて並べる)」(10の語釈、小松英雄「解釈の筋道」参照。『例解古語辞典 第三版』三省堂 平成四年一月)を、美醜について中立な言葉「たちまじる」で承け、謙遜する。「たちは、(春霞が)立ち」と、「立ち交じる」の「立ち」との掛詞。春霞の中に女官たちがいることを、こう表現する。当歌合では、春霞は52、53でも詠む。○からに ……ので。○あだにもはなの(み)えにけるかな 「あだに」は、実がない、中身がない。「はな」の縁語。本歌が、女官たちを花に見立てたのに対して、本当は花ほど美しくないが、春霞に紛れて花と見えたのだと謙遜する。○だいのころ 題の本意。○たゞふさ 従五位下大和守藤原忠房。当歌合の判者。宇多上皇に近侍し、春日御幸の際には接待役を務める。大成、大系、工藤重矩「宇多院歌壇の構造―平安前期貴族文壇の研究―」(福岡教育大学紀要 文科編 昭和五五年二月、『平安朝律令社

会の文学』平成五年 ぺりかん社所収)参照。○かのはらといふもじ、ちのはのべといふあざな、り 「じちは」は、実は。「あざな」は、実名以外の名。ここを、大成は「あの原という文字は、実は野辺という文字の別名なんです」と、原が野辺の別名ととらえる。しかし、これは「のべといふ」の後に「文字の」を補ったものである。補わなければ、「あの原という文字は、実は野辺という別名なんです」と、野辺が原の別名ということになる。いずれにせよ、忠房は、本歌の「原」を「野辺」と誤写したことについて、勝敗を決する決定的な過ちとは認めない。左方が「されば、みぎかたのまけなり」と、右方の負けを断定するのに対して、忠房は、「じちはのべといふあざな、り」と、やはり断定して強く反論する。○されど 原と野辺との誤写を忠房は本質的な誤りと認めないとする一方、不注意の誤りとはするので、逆接の接続詞を使う。○かさねてぢぞまうすべし 右歌のすぐれている点に、誤写の過失を加えて相殺し、持とすべきだの意。右方の負けを主張する左方に対して、持を主張する忠房の強い気持ち、新見を断定的に示す係助詞「ぞ」と、助動詞「べし」とが表している。○れい、たゞふさしたをまきかうべをたれて 「れい」は副詞。「したをまく」は相手の威厳を恐れて沈黙するの意。「かうべをたる」はがっかりした様。助動詞「なり」「べし」、助詞「ぞ」を使って強く反論した忠房の強気が、上皇の仰せにより、意気消沈に変化するのが印象的。ここには、上皇の權威を表現する、筆者の表現意図がはたらいっているか。「れい」とあるから、このようなことが、よくあったということだろう。○ことわりあたるどころ、よろしくしてしかるべし 助動詞「べし」は、道理

からしてそうなるのが当然との判断を表す。忠房は、「かさねてぢぞまうすべし」と、その「べし」を使って、道理に従って自説を主張する表現をとる。ところが、上皇に「このりつきず」、すなわち道理に合わない、その論理を批判される。すると、「このりあたるところ、よろしくしてしかるべし」と、理由も述べずに、論理的な（すくなくとも論理的表現をとっていた）自説を撤回し、上皇の主張が論理的に正しいとの表現（傍線部）をとるのである。ここで行われているやりとりが、どの程度論理的かはともかく、これまでみてきたように、論理性を重視する表現をとる。ここからは、この歌合の判のあり方に、実態はともかくも、論理性を追求しようとする姿勢をみることができるといえる。○右かたはよみにだにもよませず「よむ」は披講の意。冒頭の仮名日記に、「左これひらの中将、右少納言きのよしみつといふなむよみける」とある。この最後の一文によれば、これまでの一連のやりとりは、和歌を披講する前に、州浜に和歌を付して（仮名日記「左すはま、ゐる。（中略）うたはしろがねのかたみにいれて、おむなにもたせてすはまにぞたてたりける。右のすはま（中略）右はしろがねをはすのうきはにうちて、それになむうたはかきたりける」）御前に提出した際、左方が右方の過失を指摘したのである。

【他出文献】

なし

【参考】

①春日の原の青とその衣装とが織りなす色彩美から、女官たちを花に見立てた本歌に答えて、霞に紛れてかりにそう見えたのだと、謙

遜する。いわゆる氣づきの「けり」により、本歌を聞いて初めて自分たちがかりそめにも花と見えたことに氣づいたとの氣持ちが表出され、本歌とのやりとりの機微がうかがわれる。霞と花との紛れを詠んだ歌には「立渡る霞のみかは山高み見ゆる桜の色もひとつを」（後撰・春中・六三）、「はるがすみたちみつをみてにはかにはさくらははなとおもひけるかな」（宇多院物名歌合・一一・貫之）などがある。

②左方と忠房と上皇とのやりとりを記した仮名の記録文はややわかりにくいところもあり、大系におおむね従った。萩谷朴氏は、この記録文をもつて、当歌合が題意を正しく理解することが、よりいっそう厳格になっていることを示す証拠にする（『平安朝歌合日記選釈（三）』、『むらさき』昭和八年二月）。確かにそうだが、本歌の「春日の原」を「春日の野辺」とした誤写を非難した左方も、本歌「春日の原」に対して、左歌「春日野」（11）とする。この点からは、題意を正確に理解し作歌するという意識が、意識の次元だけに止まっておき、まだ作歌行為を厳しく規定するまでに至っていないと見るのが穩当だろう。

③「春日の野辺」が一般的な句であるのに比べ、「春日の原」は、当歌合当時珍しい用例である。『人麿集』に「こゝに来てかすがの^{はら}をみわたせばこ松がうへにかすみたなびく」（Ⅱ二二）、『私家集大成』中古Ⅰ所載）があるが、「春日の山」などと本文もあり、歌集の性格からも、当歌合より前の用例として信用できるものではない。『実方集』（一一・一八四）、『公任集』（五〇四・五〇五・五三二）などに用例があり、十世紀末から十一世紀にかけてようやく

定着してきた句であろう。10が甘巻本では「かすがの、へ」とあり、「躬恒集」⑦三二の「春日のはら」の本文に挿れがあるのも(10の語釈参照)、十世紀前半には一般的な句ではなかったからであろう。右方の誤写には、こうした背景がある。

【本文】

本

13 ふるさとにさくとわびつるむめのはなさくらことしぞきみにみえぬべ
らなる

【校異】

いさといひつる

○さくとわひつる—さくとわひはみつる ○むめのはな—さくらはな

○みえぬへらなる—みえぬつへらなる

【通釈】

人に見られない旧都に咲くと嘆いていた梅の花が、御幸のある今年
は、君に見えるに違いありません。

【語釈】

○ふるさと 旧都。当歌合には多く取り上げられた歌材で、九首
(15・18・23・34・45・49・50・51・54)に詠まれる。○わびつる
むめさくらのはな 古里に咲く花は、「ふるさとさくらとなりにしならのみやこ
にも色はかはらず花はさきけり」(古今・春下・九〇・平城天皇)
と、変わり果てた旧都と不変の花という対比で詠まれることが多い。

当該歌もそれをふまえつつ、「わびつるむめのはな」と擬人化する。

「わぶ」は、旧都に咲くために、人に見てもらえないのでいう。し
かし、春日御幸のあった今年は人の目に止まり、その嘆きも昨年で
終わった。そこで、完了の助動詞「つ」を下接する。「わびつる」
は、大和守として京から離れている、忠房の気持ちでもあろう。と
ころで、古里と組み合わせられる花は、平安時代はほとんど桜である。
当歌合でも、梅を詠むのは、当該歌とその返歌14だけである。当該
歌も14も、傍書に「さくら」とあるのは、そのためだろう。御幸が
三月に行われたことから、たしかに「さくら」が妥当とも思える。
しかし、初春の景物である若菜も19、21、41にあり、時節が当歌合
の景物の選択をどの程度拘束するか、問題となる。今は、かりに梅
と桜と両方の可能性があるとしておく。旧都の花だから、春日社の
巫女や女官の喩えにもなる。○きみ 当該歌は、御息所の車に入れ
たのだから、直接的には褒子をさす。また、女房たちが返歌するの
だから、歌合の場では女房を指すとしても良い。さらに、御幸の主
催者は上皇であり、その祝意性も考え合わせると、宇多上皇をさす
として、読むこともできる。その場合、旧都の女性が、京から訪れ
た男性に見初められると、恋歌の要素をもつことになる。○べらな
る 「べらなり」は、古今集以後に流行し、天曆頃にはほとんど使
われなくなる。当該歌は、まさに「べらなり」が盛んに使われてい
たころのもの。男性歌人に用例が集中するが、女流にも使用例があ
る。当歌合では、他に50に用例があり、女房の作である。参考参照。

【他出文献】

拾遺集・卷十六・雑春・一〇四五

(京極御息所かすがにまうで侍りける時、国司のたてまつりける歌あまたありける中に 藤原忠房)

ふるさとにさくとわびつるさくら花ことしぞ君に見えぬべらなる

【参考】

「べらなり」は、「べし」の語幹「べ」に、状態を表す接尾語「ら」が付き、さらに断定の助動詞「なり」がついたとされる。この語構成から、「べし」のもつ主観性と、「らなり」の形容動詞的客観性を複合的にもつという、表現の特性がある(森野宗明氏「ペラナリということば―位相上の問題を主として―」『国語学』40集 昭和五五年一月、小松光三氏『国語助動詞意味論』 昭和五五年一月 笠間書院など)。両者の関係をどのようにとらえるかで、意味の理解に違いが生じる。今、これについて考察する余裕はないが、工藤重矩氏(『べらなり』の和歌 古今後撰時代の場と表現)、『文献探求』六集 昭和五五年六月)、中野方子氏(『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―)『国文』八六集 平成九年一月)らが指摘するように、「べらなり」は、祝賀、愁訴を主題とする詠歌で使用されることが多い。つまり、最も強く作者の意図を表出する必要がある場での使用例が多いのである。

とすれば、客観的要素を重視して婉曲とすることには、問題があるのではないか。ここでは、中野氏が卓見と評価する小松光三説の、「〈表出主体の意識〉でとらえた事物を客観的実在とする助動詞」という見解に従っておきたい。小松説の要点は、表出主体の意識で事象をとらえる過程から、それを客観的実在として定位する過程へと、過程の複合体として理解するところにある。「べ(し)」「べ

「らなり」として、「べ(し)」「べ(し)」の主観を「らなり」の客観が減殺するととらえるのではなく、「べ(し)」「べ(し)」「らなり」という語構成の流れにそって、最終的に定位された客観的事実に、主観が残るととらえるのである。主観と客観を対立するものとして、主観が客観化されると考えるのではなく、主観と客観の融合とするのである。これは、線条性という言葉の本質や、作者の意図を強く表出する歌に多く使われること、中世では「べし」と同義ととらえられていたことなどを考えると、大変説得力がある。

当該歌を小松説で説明すれば、「今年の御幸で、旧都の花がきみにみえること」が、最終的に客観的事実としてあるとすることで、何の解釈も操作も介さない事実が、すでにこの御幸がめでたいものとしてあるという、普遍的な祝意の表現となる。さらに、そこに消えずに残っている「今年の御幸で、旧都の花がきみにみえるにちがない」という主観的判断が、作者の祝意を表出することとなる。

【本文】

左

14 ふるさとしおもひなわびそむめのはなほかのいろにもおとらざりけり

【校異】

○左―左 かへし ○ふるさとし―ふるさと、 ○おもひなわひそ

ある本にふるさとにさくとなわびそ

—おもひなわびそ ○むめのはな—さくらはな ○いろにも—にほ

ひも

【通釈】

ふるさとなんて思い嘆かないでくれ、梅の花よ。よそに咲く梅花の色にも劣らないことだ。

【語釈】

○ふるさとし 「ふるさと」は13語釈参照。13で、梅花が嘆く理由として詠まれたふるさとだが、副助詞「し」を下接することで、そこに咲くことが、思い嘆く理由には決して当たらないと、強調する。副助詞「し」が、当該歌のように単独で用いられるのは、平安時代では珍しい。「し」の変体仮名と繰り返し記号との類似とも相俟って、甘巻本の「ふるさと」という異文が発生したのだろう。当合には、助詞「し」は、全歌の二割弱にあたる、2、3、4、8、22、25、27、29、32、54、64にあり、当歌合の表現の特徴の一つといえる。ただし、当該歌以外は、「しも」か助詞「ば」との組み合わせである。4語釈「とぞおもふ」参照。○むめのはな 13語釈参照。○ほか 京の都が念頭にあろう。○おとらざりけり 助動詞「けり」は、この御幸で旧都の花を目の当たりにして、その美しさがどこにも負けないことに気づいた感慨を表現する。すなわち、予想や想定ではないところに、臨場感となおざりでない真実味のある表現となっている。「おとらざりけり」は、平安和歌に散見する句で、「けふ人をこふる心はあまのがはながるるみづにおとらざりけり」(宗于集・一六)などがある。

【他出文献】

なし

【参考】

本歌「ふるさとにさくとわびつるむめのはな」に対して、旧都の梅花は、よそ(京)にも負けない美しさだと、褒める。梅花は春日社の巫女の喩えでもあるから、それを賛美する歌でもある。下句は助動詞「けり」で統括され詠嘆の表現をとるが(語釈参照)、上句の根拠にもなる。

【本文】

右勝

15 みそめずもあらしものをふるさとはなにこゝろのうつりぬ
るかな

【校異】

○ふるさとはなにこゝろの—ふるさとの本に心_のともはなに
花_{ちる}に心_の

【通釈】

こんなことなら見そめなければよかった。一度見てしまったばかりに、この古都の花(春日の八乙女たち)にすっかり心魅かれてしまったことよ。

【語釈】

○みそめずもあらしものを なまじい見そめなければよかったものを。「みそむ」は古里の梅花を初めて見ることをいうが、ここで

は一目惚れする意も匂わせている。恋歌仕立ての表現。「あらし
ものを」は反実仮想。実際には、見てしまったばかりに恋焦がれて
しまったという気持ち。他出文献から推察するに当該歌は伊勢の作
と考えられるが、伊勢集にはこれとほぼ同じ表現を持つ、「みそめ
ずもあらしものをからころもたつなのみしてきるよなきかな」

(伊勢集二三〇／後撰・恋一・五三九・不知)を見出しうる。両首
の先後関係は不明だが、どちらかが旧作に依拠したものであろう。

○ふるさと 13 語釈参照。○はなにこころのうつりぬるかな 花に
心が奪われてしまったなあ。「はな」は八乙女舞を演じる春日大社
の巫女たちをなぞらせるか。とすると、当該歌は法皇の視点に立ち、
法皇が春日の八乙女たちに心動かされるさまを詠んだものと解し得
る。また、「うつり」は、「うぐひすはいたくななきそうつりがにめ
でてわがつむはならなくに」(躬恒集③三四九)、「むめがえをを
ればつづれるころもに思ひもかけぬうつりがぞする」(後拾遺・
春上・六〇・素意法師)などに詠まれるごとく、花の移り香をも連
想させる表現。梅香は袖に移るといふが、それとは逆に花に心が移
ってしまったよという気持ちをこめる。

【他出文献】

続後拾遺集・卷二・春下・九九

題しらず

伊勢

みそめずはあらしものを山ふかみ花に心のとまりぬるかな

万代集・卷一・春上・二二八

(題しらず)

伊勢

見そめずはあらしものをふるさとのはなにこころをとどめぬるか
な

伊勢集・一〇九

(春日歌合時)

みそめずはあらしものをふるさとの花に心のうつりぬるかな

【参考】

伊勢の作。恋歌仕立てで本歌の「ふるさとにさくとわびつるむめ
のはな」(13)を愛でるといふ趣向が評価され、勝を得たものか。

なお、下二句と類似の表現を用いつつ「はなにこころ」が奪われ
るさまを詠じた歌は、

承平四年中宮の賀し給ひける時の屏風に

春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな

(拾遺・春・四七・齋宮内侍)

はるふかきいろこそなけれやまぶきのはなにこころをまつぞそ
めつる(延喜十三年亭子院歌合・三一・躬恒)

あひおもはぬはなにこころをつけそめてはるのやまべにながる

くらしつ(躬恒集③八八)

散る時はうしといへども忘れつつ花に心の猶とまるかな

(貫之集③六五四)

など、同時代詠に多い。当該歌はこうした類型に依拠したものであ
ろう。

【本文】

本

16 うぐひすのなきつるなへ^にかすがの、けふのみゆきは、^をなとこそ
みれ

【校異】

○本—本六 ○なへ—^になへに ○みゆきは、^をな—^ゆみきを花

【通釈】

鶯が鳴いたのに合わせて、春日野の今日の御幸^{みゆき}(み雪)は、まさに花とみるよ。

【語釈】

○うぐひす 鶯は、本歌合では、この番にしか詠まれない。春日野と鶯が組み合わされる例は、「鶯のはかせをさむみ春日野の霞の衣いまやたつらん」(古今六帖・一・かすみ・六一六)などがあるが、他にはほとんどなく、珍しい。○なへ ある事態と同時に、他の事態が存在することを示す。○けふのみゆき 「みゆき」は、御幸とみ雪との掛詞。「やかたをのましろのたかをひきすゑて君がみゆきにあはせつるかな」(古今六帖・二・おほたか・一一七三) ○は、^をな 本文は、助詞「は」をミセケチにし、「を」を傍書する。傍書の方が文意は取りやすく、廿卷本や拾遺集ではこちらをとる。ただし、これだと、主題提示の助詞「は」がなくなるため、一首の主題が不鮮明な歌となる。「はな」は、御幸とのつながりでは、はなやかな様子の意、み雪とのつながりでは、花。雪が花によく見立てられることから、「み雪」の縁で導かれる。○みれ 「みゆき」を

「はなと」見るというのだから、単に視覚で認知したというのではなく、「彼の羽振りの良さから、ずいぶんと遺産が入ったと、私は見る」というような、判断するの意。参考「春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る」(万葉・卷五・八三九・雑歌・田氏真上)。

【他出文献】

拾遺集・卷十六・雑春・一〇四四

京極御息所かすがにまうで侍りける時、国司のたてまつりける

歌あまたありける中に

藤原忠房朝臣

鶯のなきつるなへにかすがののけふのみゆきを花とこそ見れ

【参考】

鶯の鳴き声は、「春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ」(古今・春上・一〇・忠岑)と、春を実感させるものである。そこで、鶯が鳴いたのに合わせて、御幸(み雪)を花と見ると詠んで、今日の御幸を賛美する。大系は、「みゆき」の掛詞に関して、「三月七日に雪が降るものでもなし、御幸を主として、雪と花と見まがうことを歌材にとり上げたに過ぎない」と注する。敷衍すれば、雪を花と見るという繰り返されてきた発想(特に当歌合では、逆の発想も含めて多い)ではなく、御幸にみ雪を重ねるという操作を付加することに、当該歌の独自性を指摘できる。この掛詞が、御幸と花とを緊密に、また円滑に結びつけた。

【本文】

左勝

17 いまにてはしもはなとぞいはむかすがの、けふはるのみゆきをなにとか
はいみはむ

【校異】

○左勝—左 かつ かへし ○いまにてはしも—いまにてはしも ○はな

とそいはむ—花とそいはむ ○けふはるのみゆきを—春のみゆきを

○なにとかはなにとかはいみはむ—なにとかはみむ
はなとこそみれ 或本此歌右（抹消）

【通釈】

（鶯の声も聞こえない）今でも花だと言いましよう。春日野の春の雪—御幸を花以外の何物と言うことができましようか。

【語釈】

○いまにてはしもはなとぞいはむ 本行本文の「いまにてはしも」に従えば、本歌16の「うぐひすのなきつるなへに」に呼応する形で「鶯が鳴き終わった今でも」と詠んだものと推察される。すなわち、本歌16が鶯の鳴いたその時分に御幸を花と見ると詠んだのに対して、当該歌はその鶯の声も聞こえない法皇還御時においても御幸は花としか喩えようがないと言っているわけである。他に和歌用例を探せない詞句ではあるが、当座性の強い表現とみたい。「はな」は絢爛たる行幸のさまをなぞらえる。なお、校合本文の「いまはしも」であれば、「いとしげくふみおこする人の、返事もせねば、たえぬなかといひたるに、程へてやる／いまはしもとはばこたへむさばかりと心みけ

りと心みつれば」（和泉式部統集・五七二）などの例がある。この場合は法皇の威徳ゆえ今こそは春の雪—行幸をも花と言おうと詠んだことになる。○かすがの 3語釈参照。○けふはるのみゆき 16語釈参照。「御幸」と「み雪」の掛詞。○なにとかはみはむ 春の雪すなわち法皇の御幸を何と言うことができようか。花以外の何物でもないという気持ち。第二句に「いはむ」が詠まれている点、本文としては「みむ」に蓋然性が認められようが、前者でも意は通じるので本行本文のまま通釈した。

【他出文献】

なし

【参考】

「行幸」に「み雪」を掛け、花に見立てる手法は本歌合に多く、前掲16のほか50・58・59・60にも見出される。御幸のさまを花に喩えた本歌に対し、還御時の今でも花に変わりはないと改めて春日御幸を讃えたことが勝を収めた原因であろう。

【本文】

右勝

18 ふるさとにゆきまじりたわるはなをはなとみばわれにおくるなのべのう
ぐひす

【校異】

○右勝—右 ○ゆきまじりたわるはなをはなとみばわれにおくるるを

【通釈】

旧都に行き、春日社の人々に交わり、雪に紛れる私を花と見るなら、私に遅れるな。野辺の鶯よ(もつとその声を聞かせておくれ)。

【語釈】

○ふるさと 本歌の「春日野」を受けていう。本歌合に「ふるさとのかすがののべ」(34)の用例がある。「古(ふる)」は、「雪」の縁語「降る」との掛詞。○ゆきまじわる^{りた} 影印によると、「わ」は他の「わ」に比較して上部が突起した字形で、「れ」とみられなくもない。ただ、「わ」としても「れ」としても、当該箇所と同様の字形は他歌からは見出されない。おそらく十巻本祖本の字形そのものが不明確で、十巻本はそれをそのままの形で書写したものであるまいか。「まじはる」は漢文訓読系で使われた語で、中世ころまで歌にはほとんど使われない。「ゆきまじはる」「ゆきまじる」に限れば、古今集前後に「ゆきまじはる」の用例は見つからないが、「ゆきまじる」は「ゆきまじりあまてる」もことよせてみねのかすみもたちいでにけり」(中務集⑦・一一)など、数例がある。こうしたことから、「ゆきまじれる」の可能性は捨てがたい。「ゆきまじる」より「ゆきまじわる」の方が、雪と花との紛れより、旧都の人々との交際を表す意が、前面に出ることになるか。本歌「みゆき」を受けた「ゆき」は、「行き」と「雪」との掛詞。○はなとみば 雪は花に紛れるのでいう。本歌「みゆきをはなとこそみれ」に呼応する。○のべのうぐひす 「白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺のうぐひす鳴くも」(万葉・巻十・春雑歌・一八八八)、「野辺ちかくいへるしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさ

なきく」(古今・春上・一六)など、野辺の鶯は春季の景物として定着していた。ただし、「ふるさと」とともに詠まれる鳥は時鳥がふつうで、鶯との組み合わせは少ない。

【他出文献】

なし

【参考】

本歌では、鶯が鳴くのを「なきつる」と表現する。これは、鳴くという動作が完了し、後に鳴き声が続かない事を表す。事實は、鶯は鳴き続けたかもしれないが、関心は、鶯の鳴き声を聞くとすぐに(なへに)、関心が御幸(↓み雪)を花とみることに移ったので、作者のとらえ方としては、鶯の鳴き声は一声で終わったのである(小松英雄『仮名文の構文原理「増補版」』平成一五年六月 笠間書院「第三章 ひくらし 多重表現」参照)。作品としても、鶯が何度も何度も鳴く鳴き声の、ある一声をとらえて、御幸を雪と見るというのでは、一首の表現が弛緩してしまう。

当該歌は、本歌のその「なきつる」をとらえて、もつと鳴いてほしいと、鶯に求める歌である。左歌は「かすがののはるのみゆきをなにとかはみむ」と、本歌の祝意を正面から強調するが、当該歌は、御幸(み雪)を花と見るといふ祝意の表現のきつかけである鶯に焦点を当てたため、祝意性が薄い。また、本歌の見立てを、「はなとみば」と仮定表現にしたのも、当該歌の祝意性を弱くしただろう。これが、負になった理由の一つと考えられる。